



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1984 精道教育促進協会 (芦屋)三二・三四五二芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

神はつねに現存したもう

歴史を導いてくださるのはいつでも神である

ベトレヘムの岩屋での謙遜と沈黙のうちに神はお生まれになりましたが、私たちは、典礼が再現するこのクリスマススの雰囲気はまだまだひたっています。先週は馬小屋の前にぬかずいて祈りました。福音書という史実に基づいた私たちの信仰は、ベトレヘムのゆりかごにねむる託身(受肉)されたみことば、すなわち私たちを救うために人間になられた神を礼拝せよ、と教えてくれます。クリスマスは、歴史の中心的決定的なできごと、神のご託身について、考えさせます。私たちはベトレヘムの御子のうちに神の御子を、つまり、彼によって万物は造られ、つくられた物のうちに、なにより一つとして彼によらずに造られたものはないと言われるそのみことばを礼拝します。みことばの中に生命があり、生命は人の光であり、光は闇に輝く……。私たちがそのみちあふれるところから、恩寵につく恩寵をうけた……なぜなら、恩寵と真理はイエズス・キリストによって来たからである。(聖ヨハネによる福音書の序章参照) まことにイエズスは、神の光栄を輝かし、神の本性の型であ

り、その勢力あるお言葉によって宇宙を保つ御方です。(ヘブライ1参照)
 あらゆる時代、あらゆる地方の人々に、天使は羊飼いたちに向けたあの言葉をくり返します。「すべての人々のための大きな喜びの知らせを私はあなたたちに告げよう。きょうダビドの町で、あなたたちのために救い主がお生まれになった。すなわち主キリストである。」 私たちも羊飼いたちにならって「ベトレヘムに行つて、主がお示しになったその出来事をみよう(ルカ2・8-15)、と決心する必要があります。
 真理を知るためにベトレヘムに行きましょう! 私たちの生命と歴史の真の意味が何であるかを悟ることができるよう、ベトレヘムに戻らなければなりません。広大な未知な宇宙に位置する地球上で、人間が歩む栄枯盛衰の道で、ご託身の光の照らしをうけて判じて行かねばならないのです。クリスマスは真理のメッセージであり、喜びのメッセージです。
 御父のもとへ帰ること

馬小屋の前に集う私たちは、礼拝の心で、まずはじめに過ぎゆく時、無情に去りゆく時、人間の短い一生を運び去ってしまう時について、よく考えてみましょう。イエズスは神としてのお言葉で「無意味」や「空虚」という苦悶をとり去り、神秘的ではかり知れぬ時の流れの中で、人間の歴史は御父の元へ帰ること、ただただ故国をめざすことである、とお告げになりました。従って一人ひとりの人生は、この無限の帰環の一コマ一コマであると言えます。誕生は、御父に向かって歩み始めることを意味します。生きるということとは、故国に向かう一筋の道を毎日、毎瞬間、前進して行くことなのです。
 騒がしかったこの一年をふりかえり、色々矛盾の多い人間の歴史のうちにも、神はつねに現存したもうことを思い出しましょう。人間を造るにあたり、知性と自由をお与えになった神は、人間の歴史に壮大な峰々と悲惨な深淵とがちりばめられるようお望みになりました。しかし、人類をお見捨てになつたわけではありませぬ。クリスマスは私たちが全能の神に愛されていることを保証してくれました。そして、私たちにはいつもぼんやりとして底知れぬように見えますが、神の全能はみ摺理と織り合わされていますから、次のような聖パウロのコリント人への言葉を思い出さなければなりません。「主が来られるまでは先走ったさばきをするな。主は闇にかくれたものを照らし、心の企てを現わされる。そのとき、それぞれ神から誉れを受けるであらう。」(コリント①4・5) 前世紀の偉大な思想家ニューマン枢機卿は、ある説教の中で次のように言いました。「神の御手は常に神に属する人々の上であり、見知らぬ道を導いてくださいます。この人々にせいぜいできることは、いまだ見ることはできないけれど後で見るだろうことを信じて、信仰に忠実にとどまり、主の命令に従って、神に協力することであり

ます。(「説教」一八三七・五・七)
 最後に、まもなく始まる新年に目を向けましょう。将来のことは何もわからず、何が起るかもしれないと考え、落胆をおぼえても、人間として不思議なことではありません。しかし、この点についてもクリスマススの光は私たちを照らしてくれます。善と悪の戦いが続くのが本当だとしても、歴史を導いてくださるのはいつでも神であることを私たちは知っています。そして、全ての人に約束されている神の救いのご計画に協力する決意をします。
 この謁見の喜ばしい機会をつかって、みなさんに、神の恩寵のうちに、平和に、落ち着いて、お互いの愛を思いつつ、心から新年おめでとうのご挨拶を申し上げます。(…)
 おめでとう
 ここにおられる皆さん方一人ひとり、そしてみなさんの愛する人々、親類やお友だちの方々のご多幸をお祈りします。
 この集まりを喜んでおられる子供たちや若い方々には、善良さというすばらしい贈り物を世界に運んでいただきたいと思ひます。病氣の方々、苦しんでおられる方々には、愛と忍従をもって神にお捧げした時間は、いさかも失われることがないことを思い出してくださいませうに。御父の元へ帰る切なる期待があなたがたに忍耐と信頼という勇氣を与えてくれるでしょう。
 おしまいに、新婚の方々にごあいさつ致します。現代社会の中で、最初の約束は主において、つまり創造主であり救世主である神のご意向に従って、愛と恩寵の中に、生命を与えかつ聖化する責任のもとに、婚姻を成立させる誓いであることを理解するために、使徒的勧告『家族について』(仮題)をお読みになるようお勧めします。
 (一九八一・十二・三〇)

御父のおくりもの

「私たちのために一人のみどり児が生まれました。その肩には王のしるしがある。」

ひとり子が生まれました

世界中の数え切れない兄弟姉妹が、きょう、真夜中に、この荘厳なバシリカに集まっておられます。ひとりのみどり児が生まれたからです。その子は、人間の赤ん坊がはじめから、そしてこれからもずっと母親の胎内から生まれ出ると全く同じようにして、この世にやってきました。その子は誕生したのです。

ローマ帝国中にチェザル・アウグストの人口調査が布告されたので、ガリラヤのヨゼフはナザレトの町からベトレヘムへと旅立たねばなりません。ベトレヘムはダビドの町で、ヨゼフはダビド家の出身だったからです。その地でマリアの産期は満ち、ひとりの赤ん坊が生まれました。ナザレトのマリアの初子です。母はその子を産着で包み、まぐさ桶の中にねかせました。宿には部屋がありませんでしたから。

その子は神性をそなえ、処女マリアから誕生した類のないお方でしたけれど、貧しい子供が生まれるようにしてお生まれになりました。ご降誕は真夜中であろうと預言したイザヤは、このことについては語らず次のように記しています。「やみを歩む民は、大いなる光を見た、やみに包まれた地に住むものに、光が輝いた。(イザヤ9・1)

御父のおくりもの

ここに集う私たちは、世界中の兄弟姉妹の

方々と共にこの光を迎えに行きます。一人の子が私たちに与えられた。光の御子、神からの神、光からの光。一人の子が私たちに与えられた。永遠の御父である「神は御独り子を与えたもうほどこの世を愛された……」(ヨハネ3・16)

御父のおくりもの、つまり御子が、この世に啓示されるその瞬間であります。

イザヤの描いているように、イエズス・キリストは長いあいだ待ち望まれていた方でした。それなのにその誕生は、全く思いもよらない出来事だったのです。ご降誕をとり巻くのは、夜の静けさとベトレヘム付近の洞穴の馬小屋、空虚、そしてこの空虚と孤独のなかに居合わせる、たった二人のひと、マリアとヨゼフ。

骨身にしみる空虚と孤独。けれどもそれは偉大と呼ぶこともできません。神がお生まれになったから、御子が私たちに与えられたからです。御子において、私たちはすべてを受けました。永遠の御父は、この上ないすばらしいおくりものを私たちに与えてくださったのです。

恩寵とは与える愛

「すべての人間の救いのもととして神の恩寵は現われた(ティト2・11)」と使徒聖パウロは書いています。恩寵とは何でしょうか。それはまさに与える愛であります。ベトレヘムの夜の空虚と孤独のなかで、御父の与える愛は処女マリアからお生まれになった御子を通してこの世におくられました。御子が私たちに与えられたのです。

神のおことはは私たちの信仰に深いかかわりがあり、以上お話ししたほかに色々考えるべき点が残っているでしょうが、(…)本日はもう一つだけつけ加えたいと思います。ふたたびお目にかかれる日を楽しみにしながら、キリストとその

ゆるしの秘跡とよろこび

教会、そして私とみなさんの名において、すべての信者に回心と個別の告解を呼びかけてくださるよう、お願いいたします。久しぶりにゆるしの秘跡から得るよろこびを経験する人もおられるでしょうが、

全体的な人々にとって、神のおことはを信仰のところで受け入れることは、恩寵への挑戦という意味においても大いに益になると思われ

「幸福と希望と光栄の現われを待ちつつ、この世において思慮と正義と敬虔とをもって生きるために、不敬虔と世俗の欲望を捨てよ……」(ティト2・12・13)と使徒が書いているように、御子はこの世にいらした途端から、私たちに教育なさいます。私たちはこれらすべてを、お生まれになった御子、私たちに与えられた神の御子から教わるのです。

けれどもこの瞬間に、そのみ声を聞いた人は誰もいないように思われます。ご降誕にさえも気づいた人はいないようです。マリアとヨゼフのほかにただの一人も。誰も? いいえ、すでに、最初に気づいた人が何人かいました。善い知らせを最初にうけた彼らが、最初にやって来ます。羊飼いたちです。天使は彼らに言いました、「あなたたちは布に包まれてまぐさ桶にねかせてあるのみどり児を見るだろう。(ルカ2・12) 羊飼いたちは示された方向へと出かけて行きます。「天国の主人」と出会った最初の地上の住民、永遠の御父の御子がこの世にくだられ、人々の心の中に神の国が始まることを宣言した最

ます。回心を呼びかけるとは、寛大で平和な心をもてと呼びかけることであります。それはまた、イエズス・キリストの慈悲と愛をうけ入れることであり、信仰をことほぐために道をそなえることでもあります。この協同の仕事とみなさん方の熱意を、イエズスの御母であり、使徒の元后であらせられる聖母マリアに託します。聖母がみなさんの信仰と祈りの聖務を支えてくださいますように。聖母マリアがみなさん方全員の、よろこびの源、平和の約束となってくださいますように。(カナダ司教団へ一九八三・九・二十五)

初の人々がこの羊飼いたちだったのです。ベトレヘムの夜の空虚と孤独のうちにお生まれになった御子には、どんな力がそなわっているのでしょうか。「その肩には王のしるし

■信仰をもって受け入れ、愛をもって忍ぶ人にとつて、病気は「苦しみの人」キリストとの神秘的な一致に導き、兄弟を贖うための貴重な道具にまで昇華されます。■苦しむ人びとは、人類の歴史において決定的に重要な役割を果たしているのです。

説教・講話・書簡等の抄訳

がある(イザヤ9・5)と預言者は告げています。さらに、「彼のおさめるところは广大、かぎりなき平和のうちに……、いまもいつまでも(同9・6)と。

この主権と支配を確証するものをベトレヘムの空虚と孤独の中に見出すことはできないように思われます。かえって、何もかもすべてが清貧について、「相統権のないこと」について語っています。「死ぬまで自分を卑しくして従われた……(フィリッピ2・8)あの最後の晩のことを、おぼろげに告げてさえるようです。この世に御子を迎えた最初の夜、人間的な権利や勢力を示すものは何もありませんでした。それどころか……。

にもかかわらず、毎年ベトレヘムの夜へ想いをこぼす私たちは、その度に感動し、希望と喜びがわいてくるのを感じとり喜びます。その喜びは、この世が地上的な権力と勢力のどんな手段をもってしても与えることのできないよろこびです。

教会の典礼はこのよろこびにみち、「新しい歌を主に歌え(詩篇96・1)、「全地よ、この歌に加われ、とまねきます。「天は喜び、地はおどり、海とそれに満ちるものは鳴りわたり、野とそれに満ちるものは喜びいさみ、森の木々はよろこびの歌をうたわんことを(詩篇96・11・12)。

地上における神の王国はこの眠らぬ夜に始まります。この世の権力と勢力のしるしの中にではなく、霊魂と心の喜びの中に、御子を受け入れた全ての人々の心をみたく喜びのうちに、始まるのです。(…)

この大聖堂で、そして地球上の至るところで私の声に耳をかたむけてくださっているみなさん、この恩寵がみなさんに豊かにそがれることを願ってやみません。

いと高きところには神に栄光、地には善意の人々に平和がありますように。アーメン。(一九八一・十二・二十四)

聖母―新しい契約の櫃

キリスト教の信心のあらわれとして、聖母を「契約の櫃」と称してたたえるのは、遠い昔からの習慣です。

1 旧約聖書には次のような喜ばしい確信がいくども現われます。神はみ民の間に、とか、神はイスラエルを選んでご自分の住みどころにされた、など。

選ばれた民の間に主がお住まいになることと、主がシナイ山上で結ぼうと望まれた契約との間には密接な関係があります。

それはちょうど、神が人間と同盟を結ばれた、すぐ近くにおられる、友となり、人間と約束してくださった、というに等しく、私たちが共にいることを望んでおいては神ご自身が宣言なさっています。「私は、この地に住まい、おまえたちを見捨てることはない。私は、この中で生き、おまえたちの神となり、おまえたちは私の民となる。レビ26・11、12)。

契約はシナイの山につき、人々は神の命に従って(出エジプト25・8参照)、通称「出会いの幕屋」を建てました。そして、その幕屋に「契約の櫃」が安置されたのです。櫃のなかには一枚の板があり、その石板には、主がモーゼにお与えになった十戒が刻んでありました。(出エジプト25・16、31・18と第二法の書10・1・5)。

神の現存を目に見るかたちで示す櫃は、民が砂漠をさまよひ、いずれパレスチナに落ち着くまで、歩みを共にすることになっていました。そして、やがてサロモンがエルサレムの神殿を建立することになります。契約の櫃は(列王①8・1・13)、神殿の奥の間、つまり「至聖所」に安置されました。至聖所はイスラエルのなかでもっとも聖なる場所であって、その中に主は象徴としてお住まいになるのです。

アンジェルス・メッセージ

人々に神のおすまいを示す方法として、旧約聖書の宗教用語には、「雲」という表現がよく使われています。たとえば、シナイ山にお下りになる神(出エジプト24・16)、出会いの幕屋(同上40・34・35)、エルサレムの神殿に(列王①8・10・12)おくだりになる神について話すとき、つねにこの雲について触れています。

2 ところで、今、大変な変化が生じました。大天使聖ガブリエルがマリアに現われ、神の旨を明かします。神はエルサレムの神殿を去り、今後はちがったかたちで人々の間に住まう、と。私たちと一つになるために、神はご自身で私たち人間の一人となり、人間の姿をおとりになることを望まれたのです。

聖マリアは、聖霊の神秘の雲におおわれて、神のご計画を承諾します。そしてその瞬間に、聖母の御胎は新しい契約の櫃、すなわち、託身されたみことばがお住まいになる至聖所となりました。

3 人となられた主を有する櫃となられたゆえに、聖母マリアは信者全員の典型であるということになります。私たちは「フィアット」(なれかし)の心で神のおことばを受け入れるたびに、おのおの神の聖所となります。イエズス・キリストはこのことを保証してくださいました。

「私を愛する人は私のことばを守る。また父もその人を愛される。そして私たちはその人のところへ行行って、そこに住む。ヨハネ14・25) (一九八三・七・十)

聖母の被昇天と教会

(八月十五日に)キリストの御母であり、直接の協力者であった、聖母マリアの被昇天の秘義を祝いました。全世界の教会は、聖母のこの特権を喜びのうちに思い起こしました。

教会は、被昇天の秘義のうちに、みずから求め前進する目標、すなわち、決定的な栄光に輝く姿をながめています。

聖母の被昇天と同時に、世の終わりに完成するキリストの教会の栄光が始まりました。第二バチカン公会議は、この聖母の被昇天と教会とのかわりを強調しています。ナザレトの無原罪の処女は、この地上における教会の第一にして完全なメンバーであるのみでなく、聖母がすぐに栄光にあげられたということによって、将来の教会をあらわす完全な理想となりました。主の日の訪れまで旅路を歩む神の民にとって、聖母の被昇天は現代も将来にも、世の終わりを待つ希望のしるしであります。聖母は教会が終末時にうける栄光の始まりおよび象徴である、と示す公会議は、被昇天と共に教会の「再臨」、つまり教会の完成され、完全になった姿のあらわれであると教えてくれます。

神の救いのご計画のなかで、このユニークなできごとは神の民全体にとってしるしとしての働きをもっています。すなわち、神の国完成を確かに希望できるということの印なのです。この素晴らしい印に強められた教会は、歴史を歩みつつ、みずからの最終的な完成を待ち望んでいます。それも、ただ受け身の態度を保つというのではなく、この世の移り変わるのなかで歴史の進展に専念するという積極的な態度で、歩みをつづけているのです。

それだけでなく、天の栄光に召された聖母のとりつきにいつなんどきでも頼れることをよく知っています。聖母にこのような特権的地位を与えた神は、聖母がすでに在世中から救い主キリストの側ではじめてくださった全人類の母としての役割を、今も教会内で教会のために続けるよう望んでおられます。聖母が私たちの母であり、助け手であることをきょうほど身近に感じたことはありません。(一九八三・八・二十一)

不変の教え

「主は私の光、私の救い、私は誰を恐れよう。」聖年の集いに参列するみなさんを主は元気づけてくださいますが、今読んだ詩篇の言葉はその主への信頼心のあらわれと言えます。そこで私は、この詩篇をもって、みなさん方と、みなさんを献身的な愛の心でお世話してくださっているすべての方々へのあいさつにかえたいと思います。このあいさつを送るとき、私は深い感動と心底からの感謝の念を禁じえません。かくも大勢の方々が、篤い信仰の心で、祈りと、とりわけ苦しみという貴重な捧げものをたずさえて、御血こそ流れはしないものの、祭壇上でささげられる正真正銘のいけにえにあずかってくださったからです。

さきほど皆さんの間を通った際、そこには、十字架上で苦しみ、そして私たちを贖われたキリストがおいでになることがとくにつよく感じられました。私たちのこの集いが、一九五〇年前に起こり、全人類の運命を決定した唯一無二の出来事、贖いのみわざの神秘にみだされていることに疑いをはさむ余地はありません。みなさんはご自分の苦しみをゆえに、この贖いの秘義の中心に位置し、十字架上のキリストのかたわらにおられるわけですから、世界の中心に場を占めておいでになります。病に苦しむ親愛なるみなさんを目にしながら、みなさんと同じく今苦しみを忍んでいる全ての人々のことを考えています。その方々に対しても私の抱く愛と教会の感謝の心を表わしたいと思えます。王国での幸福な住まいに向かう神の民の中で、その方々は特に選ばれた一部分をなすと、教会は考えています。事実、苦しみは一つの召し出しです。苦しみを受け入れ、それを、自分と全ての人々の救いのために、清めと和解のいけにえとして、キリストにおいて、キリストと共に、御父に捧げよ、という呼びかけなのです。「主の霊は私の上にある。すべての憂える

者をなぐさめるために」(イザヤ61・2)という預言者イザヤの言葉も耳にしました。ご存知のように、キリストはナザレトの会堂でこの預言をご自分に当てはめられました。主の霊によって遣わされたキリストは真のなぐさめ主です。人となられたみ言葉である主は、十字架上で、傷つき、喝き、血を流して苦しみ、そして死んでくださいました。そういう主であればこそ、みなさん方のお気持ちも理解し、不安にふるえる時の伴侶となり、心に触れる言葉をかけ、暗闇を照らし慰めを与えることがおできになるのです。

キリスト信者もまた、キリストと一致し聖霊に身を委ねるなら、苦しむ人々を慰めることができます。単に人間的な憐憫のことばだけで、絶望の淵に落ちこまんとしている人の

苦しみは一つの道しるし

心に入らなれば十分希望の光を投じてあげることができましょうか。いいえ、それは無理な話です。預言者が思いおこさせてくれるように、それができるのは憂える者を慰めるために遣わされた主の霊のみです。私たち「みじめな人間」の言葉は、聖霊の息吹を吹きこむだけの力を持たなければ、無力きわまりなし、と言うほかありません。

(聖霊降臨の大祝日を思い出してください。)意味深い数々の呼び名のなかで、いまだに心にひびいているのは、「最高の慰め主」という聖霊への美しいよびかけです。聖霊、つまり御父の霊のみが、病に苦しむ人や悩みを背負う人々をたとえわずかでも強めることができるように力を与えてくださいます。この点についてはたしかによくわかっていますし、

主イエズスのおことばも、かたく信じています。最後の晩さんのおあと、主イエズスが弟子たちに別れを告げるにあたり、「もう一人の慰め主」を約束してくださったことばのことです。病に伏す愛するみなさん、今、みなさんのために、慰め主聖霊をお送りくださるよう神にお願ひします。

この聖霊のたまものである慰めは大きく成長し、ついには心の喜びにまでなります。これはつじつまのあわないことではないか、とお思いになる方もありません。体が苦痛にさいなまれているとき、一体どうしてほほえみと喜びが湧いてくるのかと。

信仰のみが解答を与えてくれます。聖ペトロは教えています。イエズス・キリストはご復活によって私たちを生き生きとした希望に

生まれさせ、朽ちることのない遺産を継がせてくださったと。それゆえ、「しばしの間苦しみにあわねばならぬにしても喜びいさむ」のです。そうすると苦し

みとは、神がよりすばらしい善のために許された試練であり功徳を汲み出す泉だと悟ります。苦しみとは、いわば、一瞬の間の中断です。その後には最終的救いが控えていて、「言いつくせない輝かしい歓喜」におどろくことができるのです。

信仰をもって受け入れ、愛をもって忍ぶ人にとつて、病氣は「苦しみの人」キリストとの神秘的な一致に導き、兄弟を贖うための貴重な道具にまで昇華されます。苦しみを信仰と愛によって理解し、受け入れ、捧げる人には、限りのない展望が広がってくることでしよう。苦しむ人々は、人類の歴史において決定的に重要な役割を果たしているのです。こういう物の見方をするなら、また信仰があれば、さまざまな苦痛に苦しみがらも内

的な喜びと慰めを感じることが可能であると理解できるのです。

さきほど読んだ福音書の中には、らい病患者全快の奇跡が語られています。「主よ、おのぞみなら、私を清くすることがおできになります。(マテオ8・1) 私たちはおのおの、この祈願を自分のものにせねばなりません。社会から捨てられたあの不幸な人が主の前にひれ伏したように、私たちも、天から下った医者である主の元へ信仰をもってかけ寄る必要があります。主は人間の贖い主であられ、ありとあらゆる病気を治す力を持っておられます。肉体の病であれ、霊魂の病、つまり罪であれ、いやしてください。ですから、あのらい病人の祈りを使って一緒に主にお願ひしましょう。

――まず第一に、ここに集まっておられる、病に苦しむ兄弟姉妹のみなさん、そして、病が重くベッドを離れることのできなかった方がたのために祈りましょう。聖霊のたまもので慰め、喜びで満たしてくださいませよう。――つぎに、とくに、病者の塗油を受けるみなさんのために祈りましょう。恩寵を与える秘跡によってみなさんが光と力と慰めをあふれんばかりに注がれますように。――また召し出しによって、専門職として病に伏す人々の世話に従事されている方々のために祈りましょう。犠牲そのものである奉仕の仕事において、日々力が与えられますように。

――最後に、教会のすべての信者のために。本日、聖年を祝うにあたり、その「模範的価値」を受け入れ、あらゆる苦しむ人々を世話し、愛徳という至高の掟を実行する義務のあることを常に思い出してくださいませよう。魂と身体の医者の中の医者であり、個人と人類全体の完全な贖い者である主イエズス・キリストよ、私たちの願いをお聞き入れください。アーメン。(一九八三・六・五)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月 十日発行。定価 一部六十円送料六十円。一年予約七百二十円送料七百二十円。二十部以上の一括購入なら送料不要。

郵便振替 神戸 3-72393